

七条中学校だより7月9号

京都市立七条中学校

令和8年7月10日

発行:校長 林 秀雄

あなたの「普通のこと」とは？

先日の朝、たいへんうれしい出来事がありました。

いつもの場所で登校してくる生徒に挨拶をしていると、前日の雨の日に使用した傘入れのあるクラスのバケツに数本の傘が残されたままになっていました。本来であれば、係や当番、あるいは傘の持ち主が片付けるべきものでしょう。しかし、何かの事情があったのか、気づかなかったのか、そのままになっていました。

すると、別のクラスの生徒がその状況に気づき、自ら行動してくれました。その生徒は、残されていた傘をバケツから取り出し、バケツにたまった雨水を一つのバケツに集めて排水口へ流しました。そして、バケツをクラス順にきれいに重ね直した後、残されていた傘を教室まで運び、きちんと片付けてくれたのです。

誰かに頼まれたわけではありません。その生徒の係でも当番でもありませんでした。それにもかかわらず、その場の状況を見て、「自分にできることをしよう」と考え、最後まで行動してくれました。

さらに印象的だったのは、その後のやり取りです。この様子を見ていた生徒が、その行動をねぎらう言葉をかけました。すると、その生徒は「普通のこと」と答えました。

私たちは、それぞれに与えられた役割や責任を果たすことを大切にしなければなりません。しかし、学校生活の中では、誰かが忘れてしまったり、気づかなかったりすることもあります。そんなときに、「自分の仕事ではないから」とそのままにするのではなく、「自分にできることはないか」と考えて行動できる人がいます。

そして、その行動を特別なことではなく、「普通のこと」と言える謙虚さがあります。誰かのために行動すること、困っていることに気づいて手を差し伸べること、自分ができることを当たり前に行うこと。その積み重ねが、学校をより温かく、よりよい場所にしていくのだと思います。

七条中学校には、このように周囲に目を向け、自ら考え、行動できる生徒がいます。私は校長として、その姿を大変誇りに思います。そして、この生徒が口にした「普通のこと」という言葉のような行動が、七条中学校の「当たり前」として広がっていくことを心から願っています。

私は、七条中学校が「誰かのために行動することが普通のこと」である学校であってほしいと願っています。そして、一人ひとりが自分なりの「普通のこと」を大切にしながら、静かに徳を積み重ねていくことを期待しています。

しかし、「普通のこと」を続けることは、実は簡単なようで難しいものです。人は忙しかったり、疲れていたりすると、「誰かがやってくれるだろう」「今は関係ないから」と考えてしまうことがあります。目の前にあるごみを見ても、乱れた履物を見ても、そのまま通り過ぎてしまうこともあるでしょう。

だからこそ、自分から一歩踏み出して行動することに価値があります。その一歩は決して大きなものである必要はありません。落ちているごみを一つ拾うこと、使った物を整えて戻すこと、友達に「大丈夫？」と声をかけること、気持ちのよいあいさつをすること。そのような小さな行動の積み重ねが、やがて学校全体の雰囲気をつくり、人と人との信頼を育てていきます。

徳は目に見えません。点数のように数字で表すこともできません。しかし、徳を積んでいる人の周りには温かい空気が生まれます。そして、その人がいることで多くの人が安心し、笑顔になり、前向きな気持ちになります。

今回の生徒の行動も、そうした温かい空気を生み出してくれました。一人の行動が周りの人の心を動かし、その姿を見た人がまた誰かのために行動する。そのような善意の輪が広がっていくことこそ、学校教育の中で大切にしたいことのひとつです。皆さんもぜひ、自分自身に問いかけてみてください。「私の『普通のこと』とは何だろう。」「今日はどうな徳を積むことができるだろう。」

その答えは一人ひとり違うかもしれませんが、誰かのために行動しようとする気持ちはきっと共通しているはずです。

七条中学校が、一人ひとりの小さな善意と温かな行動に支えられる学校であり続けることを願っています。そして、「普通のことです」と自然に言える生徒が、これからもたくさん育っていくことを心から期待しています。私はこれまで学校だよりの中で、「徳を積む」ということについて何度かお話してきました。徳を積むとは、人のためになるよい行いを積み重ねることです。そして、それは周りの人のためであると同時に、自分自身を磨くことにもつながります。